

「鳴門の渦潮」周辺の歴史的世界 — 「淡路国分間絵図」の活用に向けて—

藪田 貫

はじめに

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会によって令和3年(2021)12月に刊行された『淡路島文化財総合調査報告書 1988-2000』は、コロナ感染拡大状況のために各委員の計画する現地調査が難航するなかで得られた貴重な成果である。なかでも「天保分間絵図」と題された村絵図の存在は、その後、淡路市・洲本市・南あわじ市の協力を得て、確認調査が実施された結果、全点で100ヶ村を超える絵図が確認されるに至った。本書には最新版の「淡路国分間絵図一覧」が掲載され、福永明子氏による解題が添えられているので参照されたい。

村ごとの分間絵図は縮尺1800分1の実測図で、どれをとっても畳2、3枚に広がるほどの大きさをもつのが特徴である。しかもそれは、徳島藩の直営事業として約30年かけて阿波・淡路2ヶ国で実施された成果である。伊能忠敬による全国測量との関係も指摘され、日本の測量調査の水準の高さを示す好史料でもある⁽¹⁾。村・町単位の分間地図は、一部、村に下付されたことから、藩庁に帰属した絵図と別に、村ごとに保管されることとなった。明治維新後は、郡役所に引き継がれたようで、三原郡役所の名とともに「天保度調整三原郡分間地図」と貼紙のある絵図も存在する。明らかに、郡長の下での行政に資するという意味で現用文書であったと思われる。第二次世界大戦後は、市町村役場に引き継がれたようで、「津名郡由良浦分間絵図」には「昭和28年9月由良町長生子芳郎」の貼り紙が付く。その後、正本が洲本市立図書館、副本が洲本中学校に引き継がれたと記す題箋から、この段階で、現用目的から非現用、すなわち歴史文書として扱われたと推測される⁽²⁾。1990年前後に兵庫県立歴史博物館で実施された総合調査によってリスト化されたのは、こうした歴史文書として残されていたものないし、リストであろう。

今回の再確認の過程で、リストには載るが相当数、行方不明になっていることが判明したが、そこには現用文書から歴史文書に代わることで、適正に管理するという意識が薄れた背景があったのではないかと推測される。さらに「分間絵図」に一部、差別記載が見られるという公開上の問題が伏在していることから非現用(歴史)文書として「封をしておこう」という意識が出た結果、所在不明という事態が生じたのではないだろうか。

しかし、人権上の問題が含まれる可能性を考えるなら、管理が行き届かず、迂闊に流出してしまうことへの懸念から、非現用文書として行政が適正に管理する必要がある。今回の再確認はそのための好機と、淡路3市の担当者には理解してほしい。その上で、人権問題に留意しつつ、淡路島の歴史研究に積極的に「分間絵図」を使用する道筋を付けていければと期待する。本論は、その糸口を考えようとするものである。

いまひとつ、本論には別の背景がある。「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会では、学術調査委員会に自然分野と文化分野の2部会を設置しているが、この間の成果を受けて、双方の意見交換の場が必要ではないかとの考えから、令和4年(2022)7月23日、自然部会との交流会を実施した。そこでは加藤茂弘氏が、淡路島の地形・地質的特性と砂嘴・砂州の形成について報告し、上島英機氏が「鳴門の渦潮」の発生メカニズムについて報告し

た（本書の別編に収める）。

その結果、(1) 渦潮が鳴門海峡の兩岸、徳島と淡路の地域形成にどう関与していたかを、タイムスパンの短い人文学で捉えるのは困難であることが認識された。それは予想されたことであるが、同時に、(2) ある時点での定点観測データとして歴史地理的情報を提供することで、タイムスパンの異なる自然と人文、双方の視点が交差する歴史的な経験を明らかにすることができるのではないか、という発想を得ることができた。

本論は、その着想によるものであるが、具体的に素材とするのは徳島の小鳴門海峡と淡路の由良である。

1. 大鳴門と小鳴門

鳴門海峡とは徳島の東端、大毛島の孫崎と淡路島の西端、戸崎の間をいうが、江戸期には、それを「大鳴門」といい、「小鳴門」とセットで公称されていることが多い。その小鳴門については、戸崎と中瀬の間とするものもあるが、今日、小鳴門海峡と公称されているのは徳島側にある。

小鳴門海峡が「鳴門の渦潮」と深い関わりがあることは、うず潮科学館の水利模型に、小鳴門海峡とウチノ海が含まれていることで明らかである【図1】。その一帯を、わたしたち渦潮研究メンバーは令和2年7月24日に視察したが、同じ場所を18世紀末、江戸幕府が派遣した巡見使一行が通過している。

図2は、その頃の制作とされる「阿波国大絵図」から切り取った部分図であるが、「大鳴門」に隣接する「小鳴門」が明瞭に描かれている（徳島城博物館『阿波・淡路国絵図の世界』2007）【図2】。

小鳴門海峡兩岸とウチノ海沿いの26の浦と村はこの時、幕府巡見使の案内のために地域情報を作成している。

「鳴門辺集」と題された史料で、早くに『鳴門市史』史料編に掲載され、『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』（平成29年）には町田哲氏による論考が収められている⁽³⁾。

別表『鳴門辺集』の記事一覧はその概要であるが、18世紀末、したがって200年以前の小鳴門海峡周辺地域に関する定点観測データとしてきわめて貴重である。

特徴として指摘できるのは、次の点である。

①16世紀末の4浦・1村から18世紀末

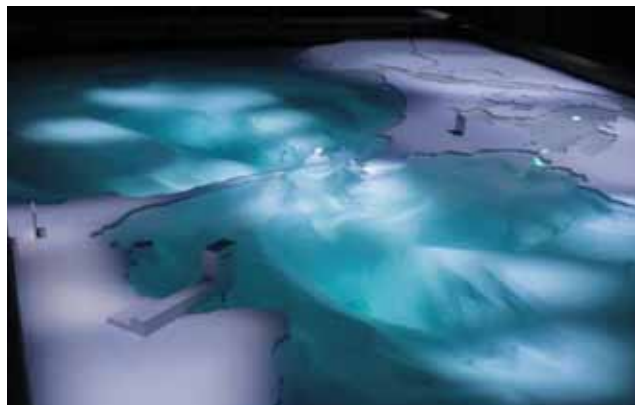


図1 うず潮科学館水利模型

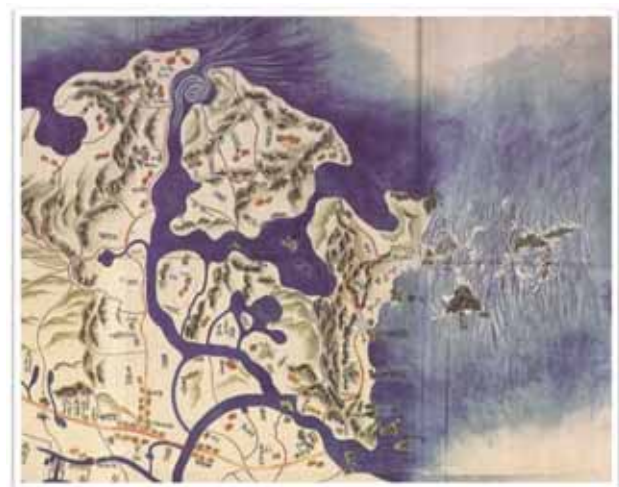


図2 「阿波国大絵図」(部分)

には 26 の浦・村へと増加したこと。

来歴欄によると堂浦と土佐泊が千年以前、林崎と岡崎が天正年間（1573－92）と開村の時期に限られるのに対し、その他は慶長年間（1596－1615）に集中している。しかも親浦が里浦・林崎浦などとあり、子浦との分村関係が明瞭である。

②その要因は塩田開発で、対岸播磨の塩田先進地から入植者があったこと。

分村の目的として大きいのは「塩浜築立村となり、浦となる」とあるように塩田開発で、その技術は播州赤穂辺りから導入されたことが、斉田・南浜・黒崎の項に示されている。

これまでの研究の結果、鳴門での塩田の始まりは慶長 4 年（1599）、播磨高砂の塩民 2 名（のちに馬居・大谷の姓を得る）が入植したことで始まったとされており、慶長 10 年、初代藩主至鎮が現地を見聞した際に、入植者 2 人に与えた「塩浜開起の制札（木札）」が残されている⁽⁴⁾。

③慶長元年（1596）に起きた伏見地震による地面の陥没が塩浜開発の契機となったこと。

その後塩浜は、40 年後には撫養塩方 12 ヶ村にまで広がっているが、その地形的な条件として注目されるのが、慶長の伏見地震である。地震によって小鳴門海峡とウチノ海周辺が陥没したことが伝えられており、塩浜が増加する一因となったと考えられる。

幸い「撫養分間絵図」（1863 年写）が残されており、青色の小鳴門海峡の両側に、黄色の山・萌黄の草原・白の田畑を取り囲むように、薄墨の塩浜が広がっている（小橋靖『徳島県塩業写真資料集』【**図 3**】。まさに入り浜式塩田の広がる姿である。



図 3 「撫養分間絵図」（部分）

2. 由良湊の出入口

(1) 古川口と新川口

さて淡路の由良にも「分間絵図」（1830 年代）が現存する。所蔵先の洲本市立淡路文化史料館で実見することを得たが、現在、目にする光景を確かめることができる。北に新川口、南に今川口、2 ヶ所の開口部を広げた由良湊である。

ところが約 200 年前に描かれた「淡路国大絵図」（徳島城博物館『阿波・淡路国絵図の世界』2007）と見比べてみると、大きく異なる。「大絵図」【**図 4**】によれば湊の中央部に開口部があり、そこを目指して大きな廻船が入港していく。大阪湾側から由良湊に開いたこの出入口は現在、存在しておらず、代わって南北に 2 ヶ所、出入口がある。

南の口は今川口、北の口は新川口と呼ばれているが、新川口については、兵庫県立歴史博物館蔵の『淡路名所図会』（编者不明、絵入肉筆本）に収められた 2 葉の図が参考になる。図 5-1 には、古城跡と畠を貫く堀、すなわち新川口が赤い線で描かれている。それに対し図 5-2 には、内海に通じる旧川口と川口番所が記されている。正徳 3 年（1713）改と

あるが、後述のように新川口の開削が明和3年(1766)であることから、約50年前の由良湊の姿であろう。

一方、安政4年(1857)に小西友直が編纂した『味地草』には、由良湊の一大変貌が書き留められている。『味地草』第1冊の由良の項では港門として工事の経緯を記した上で、新川口と旧川口の図、新川口の開削計画を記す「港門近古之図」、正徳3年改正として「港口北之図」「港口南之図」(この2図は『淡路名所図会』の2図と同じ)、そして新川口と今川口が揃った図の5点を載せている。したがって旧川口のみ、旧川口と新川口の併用、新川口と今川口の併用の三段階が、1713年から1857年の間にあったことになる。

なかでも顕著なのは、旧川口の閉鎖であるが、果たして『味地草』には、成山



図4 「淡路国大絵図」(部分)



図5-1 『淡路名所図会』(部分)

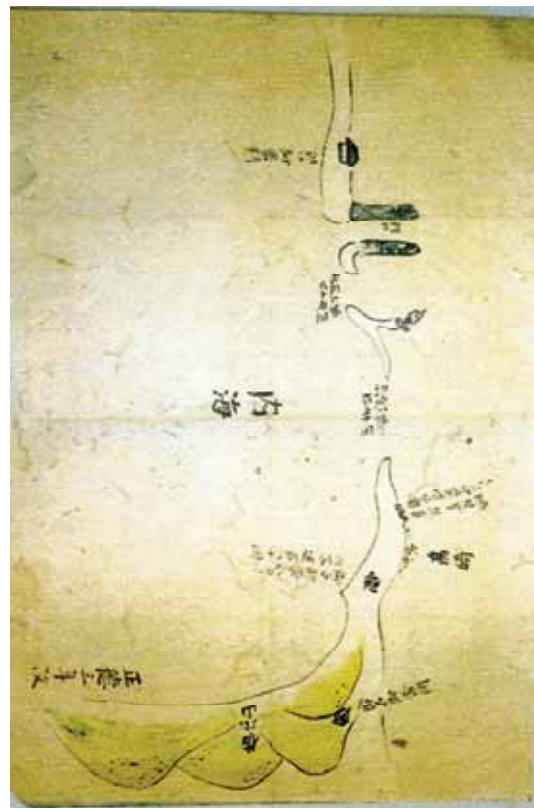


図5-2 『淡路名所図会』(部分)

から延びる砂洲の中央に「埋川口」との表記がある。旧川口は、海流のもたらす土砂で埋

まってしまったのである。それは現在、成ヶ島と呼ばれる地となっているが、元禄年間の地誌『淡国通紀』にはその名はない。

由良湊内の名所を記した「由良十二景」として挙げられているのは、次の通りである。

林丘・輝江・湊江・茅屋・洲崎・中州・鼎峯・高崎・西岡・友島・成山

成山は、「由良引け」によって洲本に移るまで城郭があった場所で、唯一の山。江は由良浦の入江、茅屋は浦西部の町家、岡・丘・峯は町家西側の段丘部と思われるが、中洲・洲崎からは海浜部に州浜が広がっているのが知れる。その州浜が拡大すると、中央部の入口は港湾として使用不能の状態になることが予想される。まさにその事態が進行した結果、湊の南北に出入口が相次いで開削されたのであるが、それは何時のことか。

幸いにもこの計画、近世の海運史に関わる重要事項ということから複数の研究成果が生まれている⁽⁵⁾。詳細はそれに譲るが、北側に新川口が開削されたのは明和2年(1765)から翌3年のことである。徳島藩が計画する形を取っているが、実際の工事は大坂の業者が請け負い、地元の村役人が藩の指揮下に、それを管轄することで進められた。その一人が佐野家であったことから、工事の一部始終が同家文書によって解き明かされている(洲本市立淡路文化史料館蔵)。

なかでも注目されるのは、今後の浚渫のために入港する船舶、とくに菱垣廻船から分一銀と称して入港税を取っていることである。由良湊が地域の中小の船舶にとって重要なだけでなく、江戸と大坂を結ぶ幹線ともいべき千石積の菱垣廻船の汐待・風待のための避難港であったことが、その背景にある。

したがって新川口の開削の結果、由良湊には中央部と北部に新旧の川口があったこととなる。そこには砂の堆積により狭まっている旧川口という問題とともに、東西南北の季節風という問題があったと思われる。大坂から大阪湾を南下して紀州沖に向かう菱垣廻船にとっては、風向きの関係で、中央部の旧川口から入るよりは、北部の新川口から入る方が安全であったであろう。

(2) 今川口の竣工

今川口の開削については、新川口ほど明確な史料がなく、開削時期も曖昧である。そんななか、手掛かりとなるのは、徳島藩主の参勤の記録である。同藩主は、徳島から大坂まで船に乗り、以後、陸路、大坂～江戸間を進んだ。したがって江戸参府も、国元への帰国も、大坂～徳島間が海路であることに変わりはない。問題は航路であるが、阿波の津田もしくは撫養から、淡路を経て須磨・兵庫に向かうルートと、淡路から泉州谷川(現在多奈川)を経て大坂安治川口に向うルートがあることが知られている⁽⁶⁾。

近年になって11代藩主斉昌の「参勤・帰国旅中日記」(徳島城博物館寄託蜂須賀家文書)が発見され、文政2年(1819)の参勤途上、初めて今川口から由良湊に入港したことが明らかとなった⁽⁷⁾。

「日記」の3月15日条には、こう記されている。

終日薄曇、生石前よりまた北風、撫養口までをしのぼり、風も和らぎ、汐崎へ押わたり、生石の汐能、池之尻新口より由良へ申ノ刻入船、此口今度はじめて入船なり、今日一向浪なく平和なり。

斉昌直筆だけに乗船者としての実感が伺える。

津田・撫養口は徳島側、そこから鳴門海峡を左に見て過ぎると、沼島と淡路島東海岸の間を抜け、土生・大石・池尻を辿ることが「徳島ヨリ大坂迄海上画図」によって知れるが、まさにそのコースを取っている⁽⁸⁾。そして由良南端の池尻から新河口を経て、由良湊に入っている。その場所に文政2年以前、今川口が開口されたこととなる。新川口の開口からほぼ50年後のことである。

文政6年にも本船は池尻に停泊し、藩主斉昌は「鯨舟ニテ新之口より」港内に入り、屋敷に向かっている。暫時滞在後、屋敷を出るが、本船が港内に入れずにいるとして「鯨舟ニテ本新口より出、高崎」で本船に乗り込んでいる。文政4年にも「由良本口へ走り込み」とあるので、当時、本口もなお機能していたと思われる。この本口は、旧川口か新川口か判断が難しいが、鳴門の撫養から北上して、淡路島東沿岸に沿いに由良に向かうコースから言えば、中央部の古川口ではないかと思われる。

こうして大坂から南下する菱垣廻船にとっては新川口、撫養から北上する藩主参勤の航路にとっては今川口が、それぞれ開削されることで、中央部を入港するルートである旧川口の機能は大きく低減する。その結果、進んだのは、成山から延びる中洲・洲崎の肥大化であろう。「由良浦分間絵図」は、その姿を表している。黄色の成山から砂嘴がジグザグに延びているのが見え（松林も目立つ）、元禄時代にはなかった「成ヶ島」という新地名が生まれる直前を窺わせる。こうして成山から延びる中洲・洲崎が島状になることで、その先端の黒崎と繋がり、現在の景観になって行った【図6】。

なお幕末には、成山と黒崎に大阪湾岸防衛のために砲台場が築かれることとなった。「成山から南に延びた砂嘴の南端に位置し、その規模は広大で南北370m、東西100m」で、明治31年（1898）以降に近代砲台として整備され、成山・生石台とともに由良要塞の中樞を担った⁽⁹⁾。成ヶ島を生み出した砂洲の肥大化に、「鳴門の渦潮」がどう関係しているかは不明だが、潮流の作用なしにはあり得ないであろう。

3. 「淡路国分間絵図」の活用

(1) 1830年代の淡路島と「分間絵図」

さて淡路の分間絵図であるが、巻末に付けられた「淡路国分間絵図マップ」を見てほしい（135頁）。色分けされることで、絵図の確認状況が示されている。もし全部の絵図の所在が確認され、利活用の道が開かれるとすれば、どうした課題が生まれるだろうか、つぎに考えてみたい。

最初の注意点は、島内の全ての大字（江戸時代の村や町・浦に相当する）である。200を超える地名が記されているが、「鳴門の渦潮」との関係で言えば焦点は海浜部である。それを仔細に見ると、いくつかの類型に分けられる。地図の北から南の順に記載すると、つぎ



図6 成山からの景観

の通りである（下線は分間絵図のあることを示す）。

- A 浦 … 岩屋・浦・仮屋・机・机南・下田・^{あまりほ}生穂・江井・塩屋・^{たけのくち}炬口・由良・福良・阿那賀・志知川・西路
- B 浦と浜（本村）… 釜口浦・釜口、佐野浦・佐野、斗ノ浦・斗ノ内、育波浦・育波、室津浦・室津、郡家浜・郡家浦、湊浦・湊里
- C 浦と浜と本村 … 志筑・志筑浜・志筑中田・志筑池内王子、都志浦・都志本・都志宮
- D 古津路・慶野・夙・櫟田
- E 国衙・国分・地頭方・市・三条・大榎列・小榎列など

興味深いことに、単位が浦のみ（A）、浦と浜ないし本村（B）、さらに浦と浜と本村（C）の3つのレベルがある。この違いの背景には、浦役や浜役などの負担体系の違いがあると思われるが、それは現実に営まれていた生業、浦役ならば漁業や海運業、浜役なら塩田、本村なら田畑の農業を前提としている。そこにどうした地理的な条件が伏在しているか、「分間絵図」があれば解明できるであろう。幸い、下線を引いた村には「分間絵図」が残っている。その解読によって解き明かされる可能性は高い。

他方、海浜部でありながらまったく異なった地名を示すのが、Dの古津路・慶野・夙・櫟田である。ここは加藤氏が明らかにしたように島内唯一の扇状地で、三原川によって作られた場所である。しかも銅鐸の出土地を含む場所でもあることから、弥生時代以降の土地の変遷が刻まれている。ここにも分間絵図が残っている。

さらに中央部には、E国衙・国分・地頭方・市・三条・榎列など、複雑で小さな範囲の地名が凝集している。それはこの辺りが、南海道の走る淡路国内の政治的中心部であったからで、古代以来近世に至る濃密な歴史的変遷が絵図に反映していることだろう。「分間絵図」の残存率が高く、その解読に大きな期待を抱かせる。

F 下灘地区（山本・城方）と油谷断層

最後のグループが、下灘地区である。「分間絵図」の残りは少ないが、天正地震と山崩れによって、住民が居住地を移動させた逸話を残している（『味地草』）。近年、淡路の震災史をまとめられた海部伸雄氏がすでに触れている⁽¹⁰⁾が、「分間絵図」と合わせることで理解が深まるのではないだろうか。

（2）えびす（戎・恵比寿・蛭子）信仰と松林

以上は、島内全体を見渡した上での「分間絵図」解読の可能性であるが、課題別の視点で見ると、つぎの2点がある。

まず海浜部との関係でえびす社（祠）の存在である。『味地草』によって拾い上げた「えびす関連記述一覧」と「えびすマップ」が資料編として付けられているが、島内で69集落・82社という密度を示す。淡路の大きな特徴と言っていいだろう。注目は沿海部に集中していることである（85村浦の内55）。その代表として福良の洲崎に祀られている戎社がある（『淡路国名所図絵』）が、州浜と漂着神（^{よりがみ}寄神）であるえびすの関係を象徴する存在である【図7】。

このえびす信仰は、郷土芸能としての門付芸であるえびす舞、あるいは淡路文楽のえびす舞などに関係するもので、淡路の自然と文化の融合を示唆する事例として注目される。

いま一つの問題は、松林の存在である。いまも慶野松原が知られているが、嘉永4年(1851)刊行暁鐘成編『淡路国名所図絵』(5巻)には、松林を描く挿絵が多数、収められ、とくに海浜部に印象深く描かれている。

その一つ福良洲崎について、「長さ三町余、長より坤にいたる幅一町ばかり、地上みな白砂にして松樹蒼々と列り生て、その景勝愛すべし」と記すが、典型的な白砂青松の世界が複数、存在していたのである。これほど典型的でなければ、松帆浦・岩屋浦・炬口浦などにも松林が描かれ、しかも松帆浦や炬口浦では松林の一面に蛭子社が見える【図8】。松林とえびすは、セットであったともいえる。

これら松林は民家を守る防風の役割もあると思われるが、樹木としての価値もあった。建築材はもちろん炭の原料としても有用であり、松葉は燃料として販売されていたことが知られている⁽¹¹⁾。

現代に残る証言を裏付けるように『淡路国名所図絵』巻一の佐野浦には、「此地より松葉薪の類を多く出し、諸国に運送す」と、名産として販売されていたことを記す。さらに洲本市立淡路文化史料館蔵新見貫次氏収集文書の中から見出した史料は、その詳細をつぎのように記す⁽¹²⁾。

津井村分として松葉 45 束、松木 1 本
 (長 3 間、末口 2 寸)、松木 16 本 (長
 8 尺~3 尺)、阿那賀浦として松木 3 本・
 松葉 2 束、伊加利村として松木 3 本・
 松葉 3 束、湊浦として松葉 3 束を入札
 するので村々に伝え、希望者があれば
 入札伺を吉田茂次左衛門殿に届けるよ
 うに。

年不詳 5 月 20 日付の「覚」と題する書面で、松木は長さで計られ、松葉は束で数えられており、俵か袋に詰められていたと思われる。それが藩の管理下で入札されているのである。

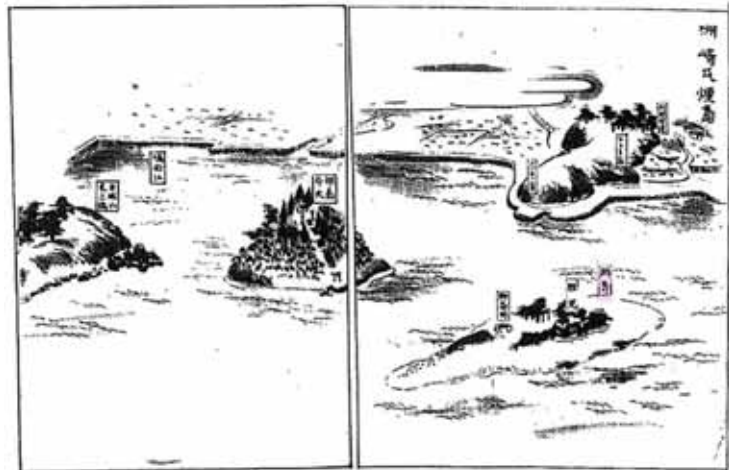


図7 『淡路国名所図絵』(洲崎と煙島)



図8 『淡路国名所図絵』(炬口浦)

こうした手続きを見る時、松林は「白砂青松」という名勝の対象としてだけでなく、人の手が入った資源として存在していたことが明らかである。『淡路国名所図絵』に導かれて「分間絵図」を見る時、人と自然の営みの融合として松林を捉えることができるであろう。

おわりに 一大塚国際美術館と「鳴門の砂」

以上、類まれな自然現象である「鳴門の渦潮」の影響を受けながら、淡路島という地域社会で営まれた出来事を、江戸時代後期の小鳴門海峡の周辺と由良湊に限定して見てきた。そこには自然の変化に対応しようとする住民たちの努力が存在した。地震の結果、海浜部が低落したことを利用しての塩浜の開拓、潮流がもたらす砂洲の堆積で狭隘となった湊の出入口に代わり、新たな出入口を開削する動きなどがそうである。それらは短期間の対応であるが、長期にわたる対応が何を生み出していたかを探る資料として、「淡路国分間絵図」が利用できるのではないか—その可能性を指摘した。

タイムスパンの長い自然の営みと、短い人の営みとの関係性を捉えてみたいという願望によるものだが、自然がもたらすモノを前提にして歴史時代の人々の営みがあるということとは間違いないだろう。

したがって人は、風土に合わせて新しい素材を発見する。塩田がそうであり、えびす信仰や松並木もそうである。ならば海峡の周辺に大量にある砂を、何かに利用できないかと考えるのももっともなことである。そうした着想から生まれたのが、美術陶板である。

大塚国際美術館初代館長大塚正士氏が語る美術陶板発明の発端は、次の通りである（『大塚国際美術館 100 選』1998 年）

我々が今回のような美術陶板の開発に着手したのは、今から 27 年前のこと、私が大塚グループ各社の社長をしておりました時に、グループ会社の一つの、大塚化学の技術部長であった私の末弟・大塚正富（現アース製薬株式会社社長）と、技術課長の板垣浩正（現大塚オーミ陶業株式会社取締役）の 2 名が私のところにやって来て、一握りの砂を机の上に盛り上げたことから始まります。

「社長、実はお願いがあるのです。」「その砂はどうしたのだ?」と尋ねますと、「これは鳴門海峡の砂です。」と言います。うちの工場は紀伊水道に面していて白砂海岸がずっと海峡まで続いており、その白砂です。

「実はこの砂でこれからタイルを作ろうと思っております。この砂はコンクリートの原料として採取し、機帆船で大阪や神戸へ陸揚げして、建築用としてトン幾らで販売しているのです。しかし、これをタイルにして 1 枚幾らで販売すると非常に価値のある商品になり、徳島県のためにも、また大塚のためにもなりますので、是非とも県知事に話してこの白砂を採取し、タイルを作る許可を貰ってほしいのです。」とのことでした。

大塚オーミ陶業株式会社の説明によると、実際に砂では陶板ができず、技術的な創意工夫の結果、現在の美術陶板が生まれたとのことであるが、発想の原点が「鳴門海峡の砂」であることに惹かれる。「鳴門の渦潮」の文化的価値を物語る逸話としてここに引いておきたい⁽¹³⁾。

- (1) 羽山久男『徳島藩分間絵図の研究』古今書院、2019年。
- (2) 令和4年5月11日、洲本市立淡路文化史料館所蔵の分間絵図を2点、館長金田匡史氏の立ち合いの下で実地調査することを得た。金田氏の配慮に感謝申し上げる。
- (3) 町田哲『『鳴門辺集』にみる一八世紀末の鳴門撫養・地域』（『『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』、2017年）。
- (4) 小橋靖『徳島県塩業写真資料集』私家版、2016年。なお小橋「淡路島と鳴門市域の塩業」（『『鳴門の渦潮』世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』2017年）も参照。
- (5) 柚木学「淡路海運の発展と由良湊」（『近世海運史の研究』法政大学出版局、1979年）、武田清市「佐野家文書で見た近世の淡路由良港」（『近世淡路史考』近代文芸社、1898年）。
- (6) 団武雄『阿波蜂須賀藩之水軍』（徳島市立図書館、1958年）。徳島城博物館館長根津寿夫氏の御教示による。
- (7) 徳島城博物館展示図録『大名の旅 徳島藩参勤交代の社会史』2005年に、「参勤・帰国旅中日記」が抄録されている。あわせて館長根津寿夫氏による論考「徳島藩蜂須賀家の参勤交代」（『地域社会と権力・生活文化』徳島地方史研究会、和泉書院、2021年）を参照。令和3月11月25日、同館で史料調査することを得た。
- (8) 同館の展示図録『阿波の水軍 森家と徳島藩』2019年に収められているが、福良から由良に至る淡路東海岸のチェックポイントが詳細に記されている。
- (9) 後藤敦史・高久智広・中西裕樹『幕末の大阪湾と台場』戎光祥出版、2018年。
- (10) 海部伸雄「史資料に残された淡路島の地震の歴史」（『あわじ』38、2021年）
- (11) 地元福良において防災の観点で文化財調査と保護活動を進めている福良学教室の太田良一氏によると、松葉は扱葉（こきば）と呼ばれ、肥料や燃料として重用され、島外に販売されていたとのことである。同様の証言は、プロジェクトメンバーの一人福家清司氏（徳島県文化財センター長）からも得られ、淡路に限らない伝統的な生活様式の一つであったと思われる。

なお松葉への注目は、7月23日に実施された自然部会との共同研究会にゲストとして参加された金田章裕京都歴史館館長による名勝天橋立に関する報告が契機となっていることを付記する。
- (12) 引用した新見貫次氏収集文書関係史料は、プロジェクトメンバーの一人木村修二氏が採集されたものである。記して謝意を表したい。
- (13) 令和4年11月4日、大塚オーミ株式会社のご配慮による信楽工場を見学させていただく機会があった。その折、刊行されたばかりの玉岡かおる著『われ去りしとも美は朽ちず』（潮出版社）を恵投いただいたが、美術陶板の創造から大塚美術館創設に至る経緯が小説として描かれ、着想の原点に「鳴門の渦潮」があることが記されている。

別表 『鳴門辺集』の記事一覧

浦村名	来歴	親村・浦	名勝	島・古城など	番所など	寺社	加子役	武士	孝行人	商人	施設	漁網	産物
土佐泊浦	千年以前		鳴門・和歌	裸島 飛島他	川口番所	○	60人	西条房太	孝行人	酒屋	牧馬場	鱒網 鯉網	蛤名物など
里浦			鳴門・和歌	経ヶ石 笹掛石		○	136人					鱒網	ワカメなど
栗津浦	慶長	里浦			川口番所	○	頭1人	原士2人				鱒網	蛤など
林崎浦	天正	四宮関之丞			塩方分一所	○	29人			酒屋4	渡し場 制札場		
立岩村	慶長	林崎浦			塩方分一所	○							
岡崎村	天正	四宮関之丞			川口番所	○				塩問屋			
弁才天村	慶長	林崎浦				○							
北浜村	慶長	林崎浦				○				塩問屋			
才(齋)田村	慶長	播州赤穂			塩方役所 分一所	○		御目見人	孝行人	塩問屋 造酒屋			才田塩
南浜村	慶長	播州				○		御銀主 御目見人		酒屋5 塩問屋			
黒崎村	慶長	播州			川口番所 塩方分一所	○				塩問屋3			
大桑島村	慶長				塩方分一所	○				酒屋 塩問屋			
小桑島村	慶長	林崎浦				○		御目見人		酒屋			
三ツ石村	慶長	土佐泊浦			塩方分一所	○							
高島村	慶長	堂浦			塩方分一所	○				酒屋	石取場		
明神村	慶長	堂浦			塩方分一所	○				酒屋			
堂浦	千年以前		阿波井大明 神	慶長年中に 堀越	川口番所	◎	126人	原士		酒屋		讃岐入漁 免許人14 槽艘	
湊谷村		堂浦より 分かれ											
小島田浦	慶長	堂浦			塩方分一所	○							鱒・蛤
撫佐村	慶長	堂浦				○							
室村		撫佐より 分かれ			遠見番所	○							
大島田村	不詳					○							
中島田浦	不詳					○							
北泊浦	不詳		小鳴門		御屋敷 御舟屋 川口番所	○	45人	御目見人				鯨敷網ほ か	ウニなど